〔倭訓栞前編六〕かりのこ　西宮記に鴨子をよめり、續千載集に、いくつづゝいくつかぞへてたのまゝしかりのこの世の人の心は、累卵の危殆をよめる也、

〔蜻蛉日記上〕三月康保四年　つごもりがたに、かりのこのみゆるを、これとをつゞかさぬるわざをいかでせんと、手まさぐりに、すゞしの糸をながう結びて、ひとつ結びてはゆひ〳〵して、ひきたてたれば、いとようかさなりたり、略下

〔源氏物語三十一眞木柱〕かりのこのいとおほかなるを御らんじて、かむじたち花などやうにまぎらはして、わざとならず奉り給ふ、御ふみはあまり人もぞめだつなゝどおぼして、すくよかにて、略中おやめきかきたまひて、

おなじすにかへりしかひのみえぬかないかなる人か手ににぎるらん、などかざしもなど心やましうなんなどあるを、大將も見たまひて、略中御かへりこゝにはえきこえじと、かきにくくおぼいたれば、まろきこえんとかはるも、かたはらいたしや、

すがくれてかずにもあらぬかりのこをいづかたにかはとりかくすべき

〔河海抄十一眞木柱〕かりの子のいとおほかるを御らむじて　鴨子西宮記　伊勢物語にかりの使とあり、あしねはふうきねにすだく鴨の子はおやにまさるときくはたのもし、是はかりのこと云々、然ば此源氏にはかもの子、かりの子のなど二樣の本あり、只かもとかりもかりの子なりと心得よと、御說に承所也、

〔本朝食鑑五水禽〕雁和名利或如字訓加リガネ

釋名、眞雁俗稱　雁金上同、眞雁者別白雁之稱、雁金者自古言雁雛、然其義未詳、

集解、鴈蒼黑而腹有黑斑、背脚黃者號眞鴈也、全體蒼黑、腹無黑斑而白者號腹白也、全體蒼黑、額白眼邊黃者號鴈金也、全體白而翅翮黑、背脚紅者白鴈也、白者味薄脂少而佳、蒼者味厚脂多而美、鴈金者